

国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(10)

劉玲

本稿は、中田祝夫編抄物大系(勉強社1977年)所収の、国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』(影印本)を底本として使用する。当該抄物の成立、資料的価値については、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(1)」(筑波大学人文社会研究科『筑波日本語研究』第17号)を参照されたい。本稿では、前記拙稿、及び「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(2)」(同18号)、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(3)」(同19号)、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(4)」(同20号)、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(5)」(同21号)、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(6)」(同22号)、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(7)」(同23号)、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(8)」(同24号)、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(9)」(同26号)に引き続き、主として、抄中

に引かれた漢籍及び集成している五山僧の諸家に注目し、それをできる限り明記して、本抄物を解説する際の手がかりになるようつとめる。なお、翻刻・校注上の諸事項については、前記の諸稿に詳しいが、要点また前記の諸稿において説明していない事項について記しておく。また、これまでに9回わたって翻刻・校注を試みてきたが、検索の便を考え、本稿の末尾に関連の情報を一覽してみる。

一 翻刻の範囲を底本の二八八頁から二九八頁とする。
 一 基本的に、原典テキストが写された方形の枠線の後に置かれている抄文の部分を翻刻の対象とする。若干、その枠線内及び枠線外の周辺に書き込まれた小文字書きの抄文が存在するが、影印本で判読しにくい箇所が多いため、本稿では翻刻しないことがある。

一 漢籍の引用が見られる場合、その書名または篇目名や章・節の名、作者名に線で記す。例えば、「才子傳卷之七 陶 字國鈞 成都人 工於詞賦 少貧 云々」(二八九一)、「樵本日 續三体詩 熊伯穎 楊州絕句 云 画橋緑水蕩晴霞 簾幕笙歌十万家……」(二九五11

）、「山谷詩 襄陽耆旧今何在 駒馬高盖徒紛紛 皆類此詩之意也」（二九三七）など。一部、「村云 監宮ハ監寺類也 須朝 唐詩正音并漁隱 須作雖」（二九一三）に見る「漁隱」（『荇溪漁隱叢話』）のように書名が略されている場合もあるが、書名の記し方については、拙稿「『三体詩幻雲抄』を通してみる室町時代における漢籍流布の状況」（筑波大学国語国文学会『日本語と日本文学』55号）において検討しており、参照されたい。その他、少数、明らかに漢籍から引かれているが、書名または篇目名や章・節の名、作者名などの情報はいつさい記載していないと見られる場合がある。例えば、「愚案 雍陶 少貧 遭蜀中乱 后播越羈旅 有詩云 貧當……雨声夜侵樓」（二八九四）、「三四句 述其意也 綾看開花 則有落花之思 得寵憂移失寵憂 之意也」（二八九五）など。このような場合について、今回、一々原本で確認するに至らず、「瀚堂典藏数据库系統」(https://www.httung.cn/)、「中央研究院漢籍電子文獻 瀚 典 全 文 檢 索 系 統」(http://hanji.sinica.edu.tw/)、「中国基本古籍庫」(黄山書社出版)を検索資料として、これらの電子資料にほぼ同様な本文が検索できた場合に、引用の最初の部分に 〓 で記し、また、【】内において関連の情報 を補うことがある。なお、「陳元信 松棚詩 清陰堪愛

還堪恨 遮却斜陽碍月明」（二八九九）や「子安和云 春風曉過故侯家 邀入南園看麗華 滿眼深紅間淺綠 流鶯偏住海棠花」など、以上の電子資料には見ることができない場合について、【】において説明することがある。

一 前記の電子資料と本抄物の引用と比較して、文字や行文の上相違する箇所が見られる。例えば、「……世人遺之以危 我遺之安 云々」（二九二三）については『排韻增廣事類氏族大全』（四庫全書）・卷二上平聲 四江・龍・鹿門採藥に「我遺之以安」とある。また、「……國初諸人書奴耳」（二八九二）については『唐才子傳』（四庫全書本）・卷五に「詩奴」とあり、「此篇類勸君紫玉 卮 滿酌不須辭……」（二八九一七）については『萬首唐人絶』（四庫全書本）卷十三・五言「歡酒」詩に「金鑷卮」とあり、「……悞入武陵花」（二九七五）については『文苑英華』（中華書局本）卷一百五十二・天部二・雜題月三十五首・僧法振「月夜泛舟」詩に「臥入」とある。これらのうち、誤脱・誤植または異文だろうところがありうるが、当時に引かれる漢籍の底本がまだ明らかになっていないため、今回特に改めず、底本の通りに翻刻する。

一 幻雲抄に集成している五山僧の諸家の説については、次のように 〓 線で記す。例えば、「雪本曰 此詩成都

之作 花園婦人之名也」(二八八4)においては「此詩……也」は「雪本」(蘭坡景藍の説)であり、また、「莫怪——繞翠云 莫恠字 偏躰也 每句有莫怪飲酒之意 盖飲酒為洗鬱懷也」(二八九7)においては「莫恠字……也」は「繞翠云」(桃源瑞仙の説)である。少数、「桃云」 緑浄——慈氏云 緑浄 藍名也 緑浄ト 連讀スル 可也」(二九三2)のように、「桃云」(桃源瑞仙の説)において「慈氏云」(義同周信の説)が引かれていると見られるような箇所について、「桃云」並びに「慈氏云」の両方に 線を引く。一部、「或云 漢江ハ 秦楚通路也 故有南北句也」(二九二2)、「猿啼

或云 王維唱陽關曲之前 別有送人之歌 其詩云 五
 雲天上來」(二九七14)のように、「或云」とは何を指すか知りえないが、五山僧の説の一つであろうと判断できるので、 線を引くことにする。

一 漢字については、底本の形態を重んじ、異体(略体・俗体を含む)の文字をできるかぎりそのまま写し、また、末尾の表1にまとめる。例えば、「將(將)」(二九一4)や「亘(宜)」(二九五3)など。「揜(掩)」(二九〇5)、「惠(德)」(二九二3)、「孝(学)」(二九五14)などのように、誤読されやすいものについ

ては、随時に【】内に記すことがある。また、【】内において「米*」(幽)「(二九〇3)」、「ヒ+夕」(夢)「(二九五17)」、「米+田*羽」(翻)「(二九二5)のように記す場合がある。*符号はその字または偏旁冠脚を左右でまたは内外で組み合わせた文字を、+符号はその字または偏旁冠脚を上下で組み合わせた文字を意味する。これらについて、初出以降はすべて通行体に改め、末尾の表2にその通行体をまとめる。一部、「漁隱後集」(二九〇3)や「灯影」(二九一14)などのように、工夫しても再現できない場合は通行体のみで記すが、一々説明せず、末尾の表3にまとめる。

一 小文字で二行書きにしてある箇所が少数あり、 \swarrow 印で改行を示す。例えば、「……海棠無語對黄昏劃割者 \swarrow 宮詞」(二九一15)とあるのは、「宮」の字から改行している。

一 変体のかなでは、「子」を「ネ」に改めず、そのまま保留する。例えば、「子マルソ」(二九一6)。

一 合字では、「ヅ」を「シテ」に、「コ」を「コト」に改める。例えば、「専ニシテ」(二九〇9)、「メラル、コト」(二九〇13)など。

一 踊り字については、底本のままに写す。その際、漢字一つと仮名一つの場合は、底本に従い、それぞれは「々」と「々」で写す。例えば、「勿怪々々」(二八九7)、

「留メラル、ソ」(二九〇8)、「朝忽々 暮擾々」(二九三3)など。また、仮名二つ以上の場合または漢字仮名まじり書きで二つ以上の場合、「レ」で写す。例えば、「人ナミ~~レ~~ニ」(二九〇13)、「水ノト~~レ~~ト」(二九二13)など。

一 振り仮名はそのまま写す。

一 濁点は少数見え、そのまま写す。例えば、「ガラリト」(二九一6)、「ヲリザル」(同)など。

一 返り点と一・二点は、「レ」と「二」のように「レ」に入れて記す。

一 転倒符、挿入符、書入れ指示については再現できず、行末の「レ」内において説明する。

一 見せ消については■で示し、「レ」内において説明することがある。

一 その他

・ 頁数は底本のそれに従い、漢数字で記す。また、あらたにアラビア数字で行数を記す。

・ 句読点は特につけず、底本の朱点により一文字分をあけることとする。なお、抄中に引かれた漢籍については、現在通行のテキストと句読点の施し方が異なる場合でも、底本のままにし、特に改めない。その他、破損や墨汚れ、または不鮮明であるため、判明できない場合に、通行のテキストを参考する。

・ 破損や墨汚れ、または不鮮明であるため、判読できない場合に、□で示す。推測されるものがあれば、それを□中に入れる。

・ その他の説明事項があれば、「レ」内において記す。

二八八

4 雪本曰 此詩成都之作 花園婦人之名也 愚案 退

之園巷柳 韓翃章臺柳之類 則為婦亦不妨也 如□□ハ

亦然 樵本曰 莫怪——二句言 為有酒不來 而為有花

來也 或云 非酒不能消憂 故頻相過也 盖以花園字視

之 則或說不可也【この行まで数行間雍陶「過南隣花園」

詩原典テキストが置かれている】「園」「巷」間挿入符

あり、右傍に「花」。「園花巷柳」にすべき】(この行以

前は前回に収めている)

二八九

1 才子傳卷之七 陶 字國鈞 成都人 工於詞賦 少

貧 云々 大中六年 授國子毛詩博士 与賈島 殷堯藩

無可 徐凝 章孝標

2 友善 以琴樽詩翰相娛 留長安中 大中末 出刺簡

州 時名益重 自比謝宣城 柳吳興 國初諸人書奴耳

云々【「サ+間」(簡)】

- 3 春風——二句 言蓋此花也 因春風力以開 因春力以落 緣合所生 緣散即滅之理 依前藏不得者也 然松花「春」「力」間插入符あり、右傍に「風」。「因春風力以落」にすべき
- 4 曰 春風比恩澤也 蓋雍陶有初用後舍之嘆坎 愚案雍陶 少貧 遭蜀中乱 后播越羈旅 有詩云 貧當多
- 【「回十心」(恩)】【坎(歎)】【「少貧……雨声夜侵樓」は「唐才子傳」(四庫全書)・卷五に見える】
- 5 病日 閑過少年時 又 閑門客到常如病 滿院花開未是貧 又 江声秋入峽 雨声夜侵樓 皆似有嘆也 与松花解可并【「角*半」(解)】
- 6 案乎 雖然天英以花園為婦人名 則易解乎 雪本【「ム+虫*佳」(雖)】
- 7 莫怪——統翠云 莫怪字 偏牀也 每句有莫怪飲酒之意 盖飲酒為洗鬱懷也 莫怪字ハ 勿怪々々ト云テ【恠(怪)】
- 8 イカニト 云処ニ 用ト 唐僧ノ 云ソ ナニトセウス ヤラウ 無益也 長字ハ 常住也
- 9 淵云 酒ノアル 家へ 細々ニ 行ハ 見花飲酒イクホトモ ナイ 歲月ヲ 可惜也 多情ナルハ 花ト酒ト也 ソレテ コソ ウイ ツライ
- 10 人間ヲハ ワスルレ也 春風——古今人不言出処花ヲ 吹開ク 風ハ ヤカテ 花ヲ 吹落也 可賞也

- 可恨也 三四句 有惜年
- 11 華之意也 春不開花 則花亦不可落也 桃云 三四句言 榮華ヲ キワメテ 得富貴モ 上一人恩澤也 戮辱セラ
- 12 レテ 貧賤ニナリ ハツルモ 一人之刑法也 蒙恩則喜 被刑 則悲 人情之常也 昨日得寵者 今日逢辱然則不如初
- 13 不受恩賞也 村云 花見ヨト 霞ヲ 掃フ 春風ハウシトヤ 云ハント ウレシトヤ 云ハント 云歌ハ此詩カラ 讀ル、也【「ホ+」+又】(受)】
- 14 補云 此詩 成都作也 雍陶成都人也 花園為「二女名」者 不可也 詩意 頻過「二花園」者 不可【「レ」為「レ」有「レ」酒 只為惜年華也
- 15 三四句 述其意也 纔看開花 則有落花之思 得寵憂移失寵憂 之意也 盖言雍陶初雖被用 後流【終(纔)】【「三體唐詩」(四庫全書)・卷二・虛接に李商隱「宮詞」詩、「君恩如水向東流 得寵憂移失寵愁」と見える】
- 16 落成都也 幻按 才子傳卷之七 雍陶竟辞榮 閑居廬岳 養痾傲世 与塵吏皆日冥矣 由是觀之 三四句有
- 【味】【「尸*戸」(廬)】【「吏(事)】】
- 17 莫怪——此篇類勸君紫玉卮 滿酌不須辞 花發多風雨 人生常別離之意也 又用杜詩 自知白髮【萬首唐人

絶句』(四庫全書)・卷十三・五言に「歡酒」詩、「勸君金鏤卮 滿酌不須辭」と見える」

18 非春事 且尺芳樽恋物華

19 陳元信 松棚詩 清陰堪愛還堪恨 遮却斜陽碍月明

養考之「陳元信詩は今回使用した電子資料には見ることができない」【「ホ+友」(愛)】

20 莫怪——村云 南隣ノ 花園カ 即有酒家也 サル

ホトニ 我カ此程 シケク 頗ニ 酒ノ 在ル処ヘ 往

来スル ハシ 怪マレムナ ユワレカ アル也 ナセニ

ナレハ 酒ヲ

21 飲テコソ 流年ノ 愁ヲモ 忘レンスレ也 年花ノ

可惜処ハ 花開ケテ ヤカテ 落ル也 流年可惜事 此

春風ハ ウレシウモ アリ 又可恨時モアル也

二九〇

1 開「レ」花 ウレシウ也 又吹落セハ ウラメシキ

此愁ヲハ 酒ヲ 飲テ 忘イテハ也

2 子安和云 春風曉過侯家 邀入南園看麗華 滿眼

深紅間淺緑 流鶯徧住海棠花【「子安和」は今回使用した

電子資料には見ることができない。以下同】【俟(俟)】

3 玉屑 第六 漁隱後集十五 宮詞云 監宮引出云々

断句極佳 意在言外 而幽怨之情自見 不待明言之也

詩貴乎【この行まで数行間杜牧「宮詞」詩原典テキストが

置かれている】【「米*」(幽)】

4 如此 若一覽而意尽 亦何足道哉

5 詩格 杜牧 宮怨詩 学掃蛾眉独出群 當時人道便

承恩 一生不識君王面 花落黄昏空揜門【揜(掩)】

6 樵本曰 監宮云々 全篇言 阿監引衆女 暫開宮門

随列相朝 不是天子恩私也 退朝之後 深宮金鎖合了

而復不得

7 朝 送日月也 長門賦曰 黃昏而望絶兮 悵獨託於

空堂 盖用之也

8 監宮——桃云 監宮ハ 三千人宮女 奉公也 三千

人ノ宮女 毎夜 ツレテ マイル 其中ヲ 見テ 留メ

ラルハソ 皇后一人ハ【「奉公」右傍に書入れ指示あり、

「宮女等ノ長」。監宮を指す意か】

9 イツモノ ツメ衆也 サルホトニ 皇后ヲハ 専夜

寵ト 云ソ トメラル、一人ハ 其夜ヲ 専ニシテ イ

ウス 餘ノ衆ハ ヤカテ 帰ル也 宮中【「ト+竜」(寵)】

10 故事ニ 嬪妃之御 二進幸 二 次日詣閣謝

恩 主者書其月日於策 有深意ト 云タハ カウ書シ

ヲカハ 恥ル 心モ アリ サノ

11 ミ 淫乱ナラセシ 用也 アルニ 宋度宗ハ 好内

一日謝恩者 有三十餘人 隆国夫人聞之大驚ソ 中貴某

人 流涕苦

12 諫 上怒 鞭之 即日掛冠而去 其人ノ名ヲ 史ニ
失タカ 惜ソ サルホトニ 度宗ハ 享年不■永ソ 詩
意ハ 監宮ノ人カ 三千人ヲ 引導【「享年」は「享年」
か】

13 シテ 開宮門 毎夜出仕也 如此スルハ 人ナミノ
ノニ 数ニ 入テ 随例而朝スルマテソ 留メラルヽコ
ト ナケレハ 別シテ 御恩ヲ 承ルテハ

14 □□□須 ^{スヘシ} ^{ラケ} 「レ」朝トモ ヨメトモ 須「レ」朝 ^{マツ} ^ヲ
ト 読タモ ヨイソ 或須作雖トモ 須ハ 猶面白 或
説 監宮ハ 老女也 老女ナルカ 故ニ 朝

二九一

1 スレトテハ 承恩ト 云ソ 可ソ 王建宮詞ニモ
監宮開鎖放人帰ト 作タソ 阿監兩辺相對立トモ 云イ
兩行宮【「力*」】 (辺)】

2 監在簾前トモ 作タソ 日本テハ 内裏ニハ 長橋
ノ 御局ト云 御所ニハ ^{カスカノ} 春日 御局ト 云ヤウナソ

3 村云 監宮ハ 監寺類也 須朝 唐詩正音并漁隱
須作雖 絶海云 律ノ詩 平本ト云也

4 須朝—— 刘公幹 贈從弟詩 何時當来儀 將須聖
明君 注 須 待也

5 銀鑰——桃云 内裏鎖鑰ナレハ 金銀ニテ セウソ
却字面白也 随例朝スレトモ ヤカテ 還レハ 銀ノ鑰
ハ 収テ 取テ ヲカレテ

6 金鎖ハ ガラリト 宮門ニサシテ 後ハ 恩断テ
子マルソ 鎖ノ ヲリザル マテハ 召サレヤ セント
思ヘトモ 金鎖合シテ 後ノ

7 心 ウサハソ 月明花落テ 又ハ 黄昏ニナリ 又
ハ 黄昏ニナリスルソ 一夜ヲ カクテ クラシ カウ
テ 一月ヲ クラシ カウテ 一年ヲ

8 暮スソ 花ト 云ハ 一年ヲ 云ソ 月ト 云ハ
一月ヲ 云ソ 黄昏ト 云ハ 一夜ヲ 云也 桃ノ抄ノ
義也

9 長門賦云 日黄昏 ^{ニシテ} 而望 ^ミ 絶 ^ヌ 兮 悵 ^{トシテ} 独托 ^{ツクケリ}

「二於空堂」^ニ「一」注 向日 黄■不來望君之心絶矣【■
虫食い、「昏」か。『六臣註文選』（文淵閣）・卷十六・
哀傷・長門賦〔并序〕に「……向日 黄昏不來望君之心絶
矣」とある】

10 續翠云 須字作雖字 可也 引出ハ 列ヲ ナシテ
引也 奉公ノカ アツテ 掌「二出入」^ヲ「二」也 出モ
入モ 御意ニテ 被仰下コトニテモ

11 ナイ 只 随例人ト 同スルマテソ 月明——長門
賦ノ意也 溯云 月明——禁門已閉後 月ノ明モ 却

堪悲也 無花奈【溯(淵)】

12 今夜 昨年モ 今年モ 昨日モ 今日モ 又 送黄
昏也 一二三句ニ 思ホト 述懷ヲ 作テ 第四句ニテ

悠々ト 云々 不尽恨ヲ

13 句中ニ カクス也 妙之極也 暫字言 其時ハカリ
暫時開門也

14 張楷和云 幾重金鎖閉重門 只見凄凉不見恩 消息
不聞春漸遠 海棠無語對黄昏【「消息」以降は見せ消、右

傍に「聽徹瓊環天外路 依然灯影月黄昏】】【「張楷和」
は今回使用した電子資料には見ることができない。以下

同】

15 巖子安題曰 閨情和云 呢喃燕子掩重門 淚滿羅幃
憶旧恩 消息不聞春漸遠 海棠無語對黄昏魯所考者ノ宮詞

二九二

1 漢江 注 禹貢——補云 禹貢無之 幻謂 禹貢

浮テ【二】于潜ニ【一】 逾コエ?【二】于沔メンヲ【一】 孔注 漢

上ホトリヲ 曰【レ】沔ト 云々 此注 即禹貢所謂沔水也

2 之義也 或云 漢江ハ 秦楚通路也 故有南北句也

3 樵本曰 漢江 龐惠公居岷山之南 平生不入城府

刘表問曰 先生不肯受官祿 何以遣子孫 曰世人遣之以
危 我遣之安 云々【「龐徳公……我遣之安」は『排韻増

廣事類氏族大全』（四庫全書）・卷二・上平聲 四江・龐・鹿
門採藥に見える。「我遣之安」は「我遣之以安」とある】

【惠(徳)】

4 又按 南史 刘道産為襄陽太守 善于臨朏 蛮夷服
順 百姓樂業 由此有襄陽愁 提戈入市裹襜裘 南渡沔

襄【朏(職)】【裹(裹)】【襜(毡)】【陽】【愁】
間挿入符あり、右傍に書入れ指示あり、「樂歌云 坡詩云

使君未來裹陽愁 提戈入」とある。「由此有襄陽樂歌云 坡
詩云 使君未來裹陽愁 提戈入市裹毡裘」にすべき【「南

渡沔」句、字足らず。『集註分類東坡先生詩』（四部叢刊）
卷之二・懷古・詩二首「襄陽樂」に「自從襜裘南渡沔」と

ある】

5 陽無事多春遊 襄陽春遊樂シム【二】何許ノトロコニカ【一】

岷山之陽漢江浦 使君朱旆來翻々 人道使君似羊杜 道

辺逢人問洛陽 中【「米+田*羽」(翻)】

6 原苦戰春田荒 北人聞道襄陽樂 目送徵鴻應斷腸

7 樵本曰 誠齋云 溶々 作清江綠淨水也 連續為妙
也 又案 韓詩 敦臨【二】眇空濶【一】 綠淨不【レ】可
【レ】唾 又 坡詩 秋風卷「黃落 朝

8 雨洗「レ」緑淨 樵本曰 溶々云々二句 言漢江益
清中有白鷗 然水色之緑 可以染衣 盖澗水湛如藍之意
也

9 樵本曰 南去云々二句 言襄陽出「二耆旧「一」之地
而平生不入「二」城府「一」者 益多 刘表問龐徳公曰

先生不「二」肯受「二」官禄「一」 何「一」以「一」【「老+目」(耆)。
「耆」は「耆」の異体字】

10 遺 「二」子孫 「一」 日 世人遺 「レ」之 以「レ」
ノコサン

危 我遺「レ」之以「レ」安 云々 今則趨「二」名利「一」
依「レ」旧者 唯夕陽送釣船而已【船(船)】

11 溶々「一」續翠云 述懷至極ノ詩也 此水色ニテ 衣
ヲ 染メハ マサシク 染ラン 白鷗ハ イツモ 閑ニ

コ、ニ イル 我ハ 絶度過【免(幾)】

12 此江也 人ハ 杜牧自云也 人間更ハ 無益也 何
日夕陽可送我帰也

13 或云 溶々 風不来而水ノトノト 流兒 四字ハ
水動静也 村云 漢水謂之鴨頭緑 又謂之蒲萄緑 其清

【兒(貌)】

14 者可知也 溶々 静兒 漾々 動兒 水色緑処 白
鷗飛也 此面白処ニ イハヤ 吾ハ 不帰釣ホトニ 羨
釣船也 コ、ヲ 過

15 者□□老トモ 釣船ハ 今日モ 明日モ 同モノニ
テ 送夕陽也 ナカメヨト ヲモワデシモヤ 帰ルラン
月待浦ノ アマノ 釣船

二九三

1 村又云 緑淨ハ 緑淨クトハ 不可讀也 緑淨ト
可「二」連讀「一」也 緑淨ト 云へハ 即水也

2 桃云 緑淨——慈氏云 緑淨 藍名也 緑淨ト 連
讀スル 可也 南去——昔此地 雖多耆旧 今無其人
恣ニ 占

3 得者 白鷗ハカリ也 南去——江辺ニ 立テ 見レ
ハ 上下ノ 人 朝忽々 暮擾々 為「レ」名為「レ」利ニ

テ アルイテ 年老マテ

4 也 我氣ニ 合タハ 釣船ノ 飯ヲ 夕陽ノ 送ル
カ 面白也 此ハ 浅々ト 見テ 面白也 人自老ハ
杜牧ト 見ハ 悪也 昔襄陽ニ 龐

5 徳公等 カクレテ 耆旧多投老也 今 人一一生南去

北来耳 一人モ コ、テ ハツル者 ナシトテ 夕陽ニ
立「尽」送釣船也 夕陽時分ニ【「サ+寺」(等)】

6 我力 目送二釣船一也 此義不可也 只夕陽力
送釣船ト 云タモ ヨイソ 東坡詩二十五卷 漁父詞

漁父吟フ 輕ル 歐ル 拳ル

7 漠々タル 一江ノ 風一雨 江辺騎レ馬ニ 是官人借二

我 孤舟カ 「二」南ヲ渡タル 山谷詩 襄陽耆旧今何在 駟馬

高蓋徒紛紛 皆類此詩之意也 「馬キ奇」 (騎) 一

8 東坡詩一 秋風卷黃落 朝雨洗綠淨 次公曰 退之

詩 瞰臨レハ 渺トシテ 空闊ナリ 綠淨ニシテ 不レ可レ唾 韓

文第二 題合江亭

9 瞰 苦濫切 東坡廿五 漁父詩引于茲「廿二十一」

10 清容居士渡揚子江云 一舸中冷烟雨飄 片帆閃々浪
招々 倚闌僧在半空語 南去北來今幾朝 「渡揚子江」詩

は『清容居士集』(四庫全書・卷十三・絕句〔七言〕)に見
える。「今幾朝」は「今幾潮」とある」

11 張楷和云 江流東去鴈南飛 柳色波光映客衣 碧漢

謾涵秋水澗 寒鴉還背夕陽帰

12 子安和云 風生潮落過帆飛 兩岸楊■点客衣 人在

江樓愁極目 一声長笛鴈西帰 ■「柳」某字見せ消、右傍

に「花」。「兩岸楊花」にすべき【聲(声)】

二九四

1 寄維揚故人 箋注 楊作揚 維揚 尚書 禹貢 淮

海マテハ 惟揚州 注 北坳淮 南距イタル 海也 史記 惟作

維 五八祖永詩

2 終入維揚郡 鄉関北路遠 季昌注 以淮水維繞曰

維揚 勝覽 揚州郡名 惟揚 又引杜荀鶴詩 維揚景

3 物勝西川 云々 然則 或作惟 或作維 此題

村義 見于次 三紙

4 寄維揚故人 村云 此詩ハ 揚州ノ 見様ニ 依テ

難「レ」心得也 此故人ハ 揚州人也 揚州ノ 住人坎

又揚州ニテ 旧日參會

5 スル坎 其人今赴他処トテ 河辺ニテ 離別スル也

餘説 非也 離別——村云 宋玉九辨 登山臨水兮 送

將帰之意也

6 縮柳祝早可帰也 一別後玉人隔「二」千山万水「二」

則恋シカラソ サテモ 先是尋君遊シ処ハ 十五橋ノ

辺也 是モ 難心

7 得詩也 村又云 城鎮——定家卿 春曙歌云 霞カ
ワ 花鶯ニ トチラレテ 春ニコモレル ヤドノアケホ
ノ 此詩

8 落句ハ ナニトモ 云ワレヌ処ソ 此歌ニテ キコ
ユルソ 同意也

9 離別——注 古樂府云々 桃云 縮「レ」柳為環ハ
古樂府何當大刀頭之意也 環与還 音近 速可還之義也
早ク 還レト云ノ祝言也【「環」右傍に「環ニ 似セテ ス
ル事ソ 環字ハ 還ノ字ニ 心ヲ モタスルソ」とある】
【「不*」(還)】

10 温庭筠折柳枝詞云 御陌青門拂地垂 千條金縷萬條
絲 如今縮作同心結 將贈行人知不知 蘇家小女旧知名
楊柳風【柳(柳)】

11 前别有情 剥條盤作銀環様 卷葉吹成玉笛声 或云
後篇作司空図詩也 又 剥條盤作剥枝縮也【「土+巴」(声)】

12 東坡長短句 注 昔人贈別必折柳者 以取絲留繫之
意 桃云 折楊柳 有兩說 一義 柳ハ 草木ノ 中ニ
テ 春ハ【絲(糸)】 【「東坡長短句」は今回使用した電
子資料には見ることができない】

13 第一ニ 緑生者也 柳ノ 春ノ 早回ルヤウニ 速
帰レト 云心ニテ 折柳送之 又東坡長短句ノ 注ノ
意ハ 柳絲長ニテ 離人ヲ 繫テ 結留也【离(離)】

14 養按 縮字 上声 潜韵 縮 鳥版切 繫 又去
声 諫韵 鳥宦切 繫也

15 離別 翠續云 昔別時 河辺ニテ 縮「レ」柳 早可
「レ」皈ト 云タレハ 其後 隔千山萬水 音信モ ナイ

ソ 比興 人ナリトモ アル【「翠續」は「續翠」にすべ
き】

16 ハシ 況玉人乎 三四句ハ アマリニ 思ホトニ
橋辺ニテ 相逢テ 遊シ 衷ヲ 思出ス也

17 淵云 玉人ハ 顔色ノ ウツクシイ人歟 又美
【「二有徳之人」】 曰【「二玉人」】也 毛詩 人如玉之
謂也

18 玉人 毛詩 有女如玉 注 徳如玉者 取其堅而潔
也白 城鎮——淵云 言昔在楊州尋玉人之夜 如此也
【「潔」「也」間に挿入符あり、「白」右傍に転倒符ある。
「潔白也」にすべき】

19 月明——桃云 昔尋君時ハ 夜飲酒 十五橋辺 遊
タシモノヲ 黄巢カ乱ヨリ 後ハ 楊州城中ハ 破ハ

テ、今ハ 只東風ニ
20 城ヲ 鎖スマテソ 昔遊ノ 様ナ コトワ ナイソ
幻謂 落句 桃義 不可也 續翠九淵義 可也 又村菴
義 同之 村云 月

二九五
1 夜旧遊未能忘焉 時則東風 処則十五橋 又村一義

2 杜牧 寄楊州韓シヤク判官詩 二十四橋明月夜 玉人

何処学吹簫 歐陽 自楊迂穎詩 都將二十四橋月 換

【「学」右傍書入れ「正音作教」とある】

3 得西湖十頃秋 山谷 寄王定國詩 淮南二十四橋月
馬上時々夢見之 盖揚州橋上宜賞月也 故和月以【「二 +
四 + 十夕」(夢)】

4 記曰遊也 補云 第二句 有玉人字 第四句 有十

五橋字 盖本於杜牧寄韓判官詩也 又城鎮【「二東風
ヲ

【「二」点也之【「風」「点」間に挿入符あり、「之」右傍に
転倒符ある。「城鎮東風之点也」にすべき】

5 勝覽四十四 揚州部 隋致並以城門坊市為名 後韓

令坤省 築州城 分布阡陌 別立橋梁 所謂二十四橋者
或

6 存或廢 不可得而考 幻謂 増注二十五橋 古本

亦作五 不審 勝覽等皆作二十四橋【「勝覽」右傍に書入
れ「四十四卷」とある】

7 故人 幻謂 揚州人也 喬曾赴揚尋之 故人頃在

他処而會焉 故人又販揚州 故云 離別河辺 云々 又

謂 曾會【曾(嘗)】

8 揚州之後 喬赴他 故云 離別 季潭和張来儀見寄

詩 高城不閉東風住 送尽松声到榻前【季潭「和張来儀見
寄」詩は今回使用した電子資料には見ることができない】

9 雪樵本曰 離別云々 全篇言 喬 池州人 暫於揚

州別【「二故人「二」々々 縮【「二柳條「二」 以贈【「レ」我

自尔以降 各隔千山万水

10 今見【「二月明【「二 記【「二曾相尋之地【「二 則揚州
十五橋也

11 樵本曰 續三体詩 熊伯穎 揚州絶句云 画橋緑水

蕩晴霞 簾幕笙歌十万家 記得玉人携酒【「莫十巾」(暮)】

【「推十乃」(携)】

12 共 仙壇和月看瓊花 盖似摹此詩也【熊伯穎「揚州絶

句」詩は今回使用した電子資料には見ることができない】

13 樵本曰 縮与環同 環盖還之義也 司空図樂府云

剥枝縮作銀環様 卷葉吹為玉笛声 又劉禹錫詩

14 而今云々知不知 盖今所用之縮字 可并案也 玉人

字 本于杜牧 二十四橋明月夜 玉人何処孝吹簫之句

又欧詩【「孝(学)】

15 捨將一 又東坡二十四橋亦何在 換此十頃玻

璃風 又山谷

淮南云々 見于前 盖和月明記曾遊之

【「王季利十木」(璃)】

16 語 以彼數篇詩推之 則益有味者也

17 和云 分携佳意久蕭條 目送行雲鴈影遥 昨夜梧桐

和月睡 分明一夢到藍橋【「ヒ十夕」(夢)】

二九六

1 雪樵本曰 案愚 唐詩六十四 逢作送 徵作招 潮作湖 由是視之 詩意易會也【「案」「愚」間に挿入符あり、「愚」右傍に転倒符ある。「愚案」にすべき】

2 逢友人之上都 養按 古本題註 与新本注同 此注 古註 玄宗改長安為京兆 肅宗改曰 上都【(無)】

3 或云 玄宗幸蜀 故謂成都 為上都 觀中取之 續翠九淵等諸老不取之 補云 友人不書名字者

4 非其人乎

5 玉帛——統翠云 此詩難會不讀 則好 法振在「二」武陵「二」逢「二」客之「二」上都 々々 乃京也 楚客モ 舩モ 春帆モ 女【「之」に二点が誤で、一点にすべき】

6 人也 武陵ヨリ 婦ノ点也 所「二」相送「一」之友 コナタノ 武陵ノ 桃花ヲ 回 可「二」相望「二」也 頭【「首」見せ消、文末に「頭」。「回頭」にすべき】

7 淵云 觀中說 法振 武陵人也 武陵与上都之間 若無江海 則春帆語不審 慈氏曰 武陵与京之間 有楊子江

8 也 楚客ハ 屈原ナトカ キ、耳ソ 猿啼処ニテ 相別テ 法振カ モトカラ イタ 武陵エ 舩也 武陵ニ 舩ノ点也 潮頭——桃花ヲ

9 武陵ニ カケテハ 見マイ 及第ノ吏ニ 可「レ」見

ソ 禹門桃花浪及第故事也 京へ ノホル人 ナレハ

目出度及第セヨト 祝スル也 和

10 桃花浪帆□如飛ニ イフキ マメニテ ノホルヘキ ソ 是ハ 慈氏ノ 義也 又村一義 空藝所言見于次

11 村云 此題誤坎 不審 武陵ニヨリノ点也 友人赴 上都之路ニ 有武陵坎 友人猿啼時ニ 武陵ニ 舩ヲ 送也 畢竟ハ 上都

12 武陵ノ ワケヲ シラヌソ 黙云 送客時 猿亦 啼矣 即云 猿亦相送 甚妙也

13 桃云 □云 々々 玉帛云乎哉ト 云テ 人ヲ 礼 スルニハ 玉也 帛ヲ イタス也 貴「二」其人「二」也 今肅宗即位 大赦天下ニテ 諸国ノ 流人ヲ

14 □□間 田舎ニ 居者ハ 稀也 昭代ニテ 如此ナ レトモ 我ハ 不「レ」舩シテ イタソ 我ヲハ 送者モ ナシ 只 猿啼カ 我カ 武陵へ 舩ヲ 送マテ也 云々

二九七

1 潮頭——友人ハ 召入京ヲ 相送テ 我独舩「二」于 武陵「二」ホトニ 心ハ 武陵ノミニテ 望入桃花也 友人ハ 赴上都ホトニ 春帆ナレハ 故

2 如飛ニシテ 行也 常ナラハ 帶雨テハ 雖可遲 今ハ 上都ニ 行ト 云イ 時節ハ 三月ノ比ナレハ

帶雨ニテ 如■ニ ハヤイン【■「風」某字見せ消、右傍に「飛」。「如飛」にすべき】

3 幻按 履歷 法振与姚合同時人 盖姚合元和十一年進士也 然則 桃抄 為肅宗即位 時作非也【「元和十一年進士也」右傍に書入れ「憲宗時也」とある】

4 幻謂 梵天寺 法欽所編 宗高僧詩集 載法振者三首 月夜汜舟詩 西塞長雲尽 南湖片月斜 漾【「宗」右傍に「宋欽」。「宋高僧」の意】【「ゞゞゞ」(汎)】

5 舟人不見 悞入武陵花全 由是觀之 法振居武陵平 6 補云 玉帛——梵國雖「レ」多【二】遺賢【一】 除【二】友人【一】之外 召「帰」者 稀也 此義為「レ」是 猿啼——武陵屬【二】峽中【一】也 楚客凡言逐

7 客也 猿啼 言猿亦啼而送之 况人哉 此義非也 一義云 放翁 朝雲暮雨捨虚語 一夜猿啼明月中 詩意ハ 聽「レ」猿【虚(虚)】

8 不「レ」堪「レ」悲之処ニテ 送【二】友人之【一】「レ」京ハ 悲ノ中 歛也 潮頭——三四句言 賈嶋詩 而今又 渡菜軋水 却望并州是故郷 之意也 又【葉(桑)】【軋(幹)】

9 コナタヲモ コイシク 思テ 回頭可「レ」望【二】武陵花【一】也 一片——二之句ノ 所悲ヒキカヘテ ト、メイテ ノホルソ サレトモ コナタテハ 不忘ソ 此義可也

10 一義云 友人赴【二】武陵【一】也 法振望「レ」之 則

入【二】桃花【一】也 一義送【二】友人【一】【二】武陵マテ 来テ コ、カラ 楚エ 帰也 法振在楚也 此義非也

11 幻謂 第二句 唐詩正音 刘文房送襄郎中貶吉州詩 猿啼客散暮江頭 人自傷心水自流之意也

12 幻按 方輿勝覽三十 常德府有武陵桃源 又云 禹貢荊州之域 又刘禹錫楚望賦 武陵故郢之裔邑 又有滄【「域」】又「一」間に挿入符あり、左傍に書入れ指示あり、「春秋■戦国時属楚 漢更武陵郡」とある】

13 浪水 乃漁父濯纓之処 又有招屈亭 由是觀之 武陵即楚也 楚客即在【二】武陵【一】者也 然則友人自【二】武陵【一】帰之義 可乎

14 猿啼 或云 王維唱陽関曲之前 别有送人之歌 其詩云 五雲天上來 三星月下撃 猿啼無滴涙 花落

【王維詩は今回使用した電子資料には見ることができない】

15 フンシ 不聞声 五雲——賞「レ」客心也 又言 以【二】五指【一】把盃也 三星——鉢ヲ ヲコナウ時 持應量器ヤ

ウニ 以【二】三指【一】撃「レ」盃也 猿啼——

16 猿啼三声淚霑裳ニテ 猿ツヨク ナケハ 後ニハ
涙尽無一滴 其様ニ 一滴モナク 酒ヲ 無露ニ 飲メ
ソ 花落——盃ヲ

17 傾トモ 一滴モ スツル 声ナイソ 法振詩ハ言
ハ 唱此曲 相送也 村云 此義大非也 桃云 五雲
云々 詩未見出処

18 潮頭——蘭云 九淵話云 南遊之日 此境 皆日
地無潮 盖陵谷変之故乎 抑亦詩人得句不拘之乎 百卷
【一日】「此」間に挿入符あり、右傍に「問」。「南遊之
日 問此境」にすべき】

19 唐詩六十二 潮作湖 盖湖即池水之類也
20 淵云 玉帛云々 楚客 逐客也 自屈而起也 二句
言以玉帛徵逐客 故皆赴上都 而野少遺賢 斯人亦其一
也 今法振相送

21 武陵而飯 子皆聞猿啼 益斷別傷也 猿啼客散楚江
頭 意相同也【昔(時)】

二九八

1 □本 山谷詩 和蒼元明黔南贈別 萬里相看忘逆旅
三声清淚落離觴 云々 可并案

2 又曰潮頭——二句言 一別兩地 友人亦可回望武陵
桃花也 然春帆疾如飛也 語本老杜野館館濃花發 春帆
細雨来也

3 雪樵本曰 潮頭者南遊人云 自武陵至京 則四無海
盖路經楊子江 抑言之欵 詩家務作佳句 故無其景 卒
皆有之也 不知孰是焉

4 和云 故人聚散曉星稀 春滿溪山喜獨歸 一片離情
同去鴈 隨君西逐嶺雲飛

已前共六首

如心云 自第二句 出第三句 々々々 一呼 則第四句應者 謂之一呼一應格
也 或云 景物中 有人

村云 持□□玉帛□□ 雖「レ」徵□□諸方賢□□ 吾友在「レ」楚者 未「レ」見
「レ」徵 今偶赴「レ」召巫峽辺猿啼処マテ 相送也 路經□□

武陵「レ」京ヘノホラント スルホトニ 桃花洞ヲ 見ヤリテ 可透也 此武
陵ノ義ハ 空羣ノ義也 是モ

穂トモ セメテハ也

△表1△先に異体の文字を置き、その後の()の内に通行
体を入れる。

免(幾) 韵(韻) 鶯(鶯) 烟(煙) 徃(往)
華(華) 華(華) 恠(怪) 會(会) 盖(蓋)
幸(学) 軋(幹) 鴈(雁) 觀(觀) 氣(氣)

耆(耆) 亘(亘) 虚(虚) 京(京) 况(况)
 峽(峽) 溪(溪) 絲(糸) 俟(俟) 國(国)
 昏(昏) 參(參) 皆(時) 取(職) 曾(嘗)
 將(將) 翠(翠) 聲(声) 節(節) 舩(船)
 璵(毡) 巢(巢) 乘(桑) 續(統) 捻(総)
 帶(帶) 臺(台) 遲(遲) 傳(伝) 荅(答)
 當(当) 惠(德) 獨(独) 讀(読) 博(博)
 發(発) 廢(廃) 富(富) 并(並) 篇(篇)
 徧(徧) 兒(貌) 滿(滿) 无(無) 夢(夢)
 餘(余) 坎(歎) 离(離) 裹(裹) 刘(劉)
 柳(柳) 涼(涼) 兩(両) 楼(樓) 終(纒)

〈表2〉行末の【】中において、【「角*半」(解)】や

「推+乃」(携)のように記す異体の文字の、その通行体すなわち()内の文字「解」や「携」を一覧した。

*印の類：解 還 騎 汜 辺 幽 廬

+印の類：愛 恩 簡 携 受 声 寵 等 幕 夢

*印と+印の組み合わせた類：翻 璃 雖

〈表3〉表2のように工夫しても再現できなかった異体の

文字の、その通行体を一覧した。ただ、操作困難なため、少数ユニコードには文字がないものも割愛した。

隠 影 纓 穩 焉 過 回 懷 隔 卷 閑 看

換 還 勸 興 經 見 此 者 受 授 初 召

將 承 凶 雖 声 說 楚 遭 第 段 對 荷
 獨 聞 暮 蒙 樣 覽 臨 流 留 旅 麗 簾
 路

〈付録〉

閲覽・検索の便を考え、「国立公文書館内閣文庫
 藏天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注」(1)～(9)
 に収めた唐詩の詩題・作者・詩の首聯、そして掲載号・
 頁数を合わせて示す。

「国立公文書館内閣文庫藏天文五年写『三体詩幻雲抄』翻
 刻と校注(1)」

筑波大学人文社会科学研究所『筑波日本語研究』第11号

p. (1)～(32)、2013年1月

『三体詩幻雲抄』第一冊 一頁～八〇頁(うち、一頁～四

六頁は「三体詩」原文のみで、翻刻していない)

綱目

唐三體詩註綱目

唐分十道之圖

唐高祖開基圖

唐地理圖

求名公校正咨目

諸家集註唐詩三體家法諸例

唐世系紀年

三體集一百六十七人(三体詩詩人の履歴)

「詩自三百篇以還」

「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注 (2)」

同第18号、p. (16)-(48)、2014年1月

『三体詩幻雲抄』第一冊 實接 八二頁～一二二頁

華清池・杜常・行盡江南數十程

宮詞・王建・金殿當頭紫閣重

吳姬・薛能・自「一作身」是三千第一名

已上共三首

歸雁・錢起・瀟湘何事等閒回水

逢賈島・張籍・僧房逢著款冬花

江南春・杜牧・千里鶯啼綠映紅水

已上共三首

「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注 (3)」

同第19号、p. (13)-(57)、2015年1月

『三体詩幻雲抄』第二冊 實接 一一三頁～一七一頁

綱目

別李浦之京・王昌齡・故園今在瀟陵西

題崔處士林亭・王維・綠樹重陰蓋四隣

楓橋夜泊・張繼・月落烏啼霜滿天

贈殷亮・戴叔倫・日日河邊見水流

湘南即事・(戴叔倫)・盧橘花開楓葉衰

送齊山人・韓翃・舊事仙人白兔公

送元使君自楚移越・劉商・露冕行春向若耶

竹枝詞・李涉・十二峰頭月欲低

香山館聽子規・竇常・楚塞餘春聽漸稀

長慶春・徐凝・山頭水色薄籠烟

宮詞二首(後首或以為杜牧之作)・王建・金吾除夜進儺

名(其一)／銀燭秋光冷畫屏(其二)

城西訪友人別墅・雍陶・澧水橋西小路斜

貴池縣亭子・杜牧・勢比凌歊宋武臺

「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注 (4)」

同第20号、p. (1)-(18)、2016年2月

『三体詩幻雲抄』第二冊 實接 一七二頁～一八四頁

送隱者・許渾・無媒逕路草蕭々

送宋處士帰山・(許渾)・賣藥修琴婦去遲

秋思・(許渾)・琪樹西風枕簟秋

黄陵廟・李遠・黄陵庙前莎草春

「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注 (5)」

同第21号、p.(1)-(22)、2017年2月

『三体詩幻雲抄』第二冊 實接 一八五頁～二〇四頁

贈彈箏人・温庭筠・天寶年中爭玉皇

韋曲・唐彥謙・欲寫愁腸愧不才

曲江春望・(唐彥謙)・杏艷桃嬌奪晚霞

鄴宮・陸龜蒙・花飛蝶駭不愁人

閨鄉卜居・吳融・六載抽毫侍禁闈

尤溪道中・韓偓・水自潺湲日自斜

已上共二十四首

「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(6)」

同第22号、p.(1)-(23)、2018年1月

『三体詩幻雲抄』第二冊 實接 二〇四頁～二二三頁

丹陽送韋參軍・嚴維・丹陽郭裏送行舟

寒食・韓翃・春城無處不飛花

上陽宮・竇庠・愁雲漠々草離々

贈楊鍊師・鮑溶・紫烟衣上綉春雲

和孫明府懷舊山・雍陶・五柳先生本在山

贈日東鑿禪師・(鄭谷)・故國無心渡海潮

旅懷・杜荀鶴・月華星彩坐來收

已前共七首

「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(7)」

同第23号、p.(1)-(26)、2019年1月

『三体詩幻雲抄』第二冊 實接 二二三頁～二四四頁

寄別朱拾遺・劉長卿・天書遠召滄浪客

題張道士山居・秦系・盤石垂蘿即是家

寄李渤・張籍・五渡溪頭躑躅紅

南莊春晚・李群玉・草暖沙長望去舟

長溪秋思・唐彥謙・柳短莎長溪水流

已前共五首

隋宮・鮑溶・柳塘烟起日西斜

綺岫宮・(王建?)・玉樓傾側粉墻空

送三藏歸西域・李洞・十萬里程多少難

已上共三首

「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(8)」

同第24号、p.(1)-(24)、2020年1月

『三体詩幻雲抄』第二冊 實接 二四四頁～二六二頁

長信秋詞・王昌齡・奉帚平明金殿開

吳城覽古・陳羽・吳王舊國水烟空

江南意・于鵠・閒向江邊採白蘋

閑情・孟遲・山上有山掃不得

曲江春草・鄭谷・花落江隄簇暖烟
山路見花・崔魯・曉紅輕折露香新

已前共六首

漢江・(杜牧)・溶々漾々白鷗飛

寄維揚故人・張喬・離別河邊縮柳條

逢友人之上都・僧法振・玉帛徵賢楚客稀

已前共五首

「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注 (9)」

同第 26 号、p. (1) - (29)、2022 年 1 月

『三体詩幻雲抄』第三冊 二六三頁〜二二八頁

綱目

逢入京使・岑參・故園東望路漫々

送客之上黨・韓翃・官柳青々匹馬嘶

病中遣妓・司空曙・萬事傷心在目前

華清宮・王建・酒幔高樓一百家

宣芻開元寺・杜牧・松寺曾同一鶴棲

山行・(杜牧)・遠上寒山石徑斜

寄山僧・張喬・大道本來無所染

寄人・張佺・酷憐風月為多情

已前共八首

本稿において翻刻・校注の部分は以下のとおりである。

『三体詩幻雲抄』第三冊 二八八頁〜二九八頁

過南隣花園・雍陶・莫怪頻過有酒家

宮詞・杜牧・監宮引出暫開門

〈付記〉本稿は 2016 年度中華人民共和國国家社会科学基金項目「日本内閣文庫蔵室町時代抄物写本『三体詩幻雲抄』与唐宋詩的輯佚、校勘研究」(一般項目/項目号 16BZ1062) 資助を得たものであり、その研究成果の一部とする。特記して感謝を申し上げる。

(リュウ・レイ/北京師範大学外国語言文学学院 教授)

(二〇二二年十月十五日受理)